

献 辞

2005年3月末をもって、毛利健三先生はご定年をむかえ、専修大学を去ることになります。毛利先生は、1995年に本学に赴任されて以来10年にわたって、わが経済学部における教育の充実と研究の進展に尽力されてこられました。ここに経済学部は、『専修経済学論集』第39巻3号を退職記念号として、先生に献呈し、その功績をたたえるとともに、そのご苦勞に対して、あらためて心からの謝意を表する次第です。

毛利先生は、1934年9月に福岡市で生まれ、1958年に東京大学経済学部を卒業後、同大学院修士課程（経済史専攻）にすすまれ、63年に同博士課程を修了されました。その後東京大学社会科学研究所助手および福島大学経済学部講師・助教授をへて、1973年から東京大学社会科学研究所に勤務され、82年には教授に就任されております。本学経済学部には、国際経済学科の教授として、1995年に赴任され、今日にいたりました。

毛利先生は、学部の講義としては、「世界経済史」、「ヨーロッパの経済II」を、また大学院では「国際経済論特論」、「国際経済論特殊研究」を担当されてきました。その一方で先生は、大学の内外で、多くの役職にも就かれています。学外では、土地制度史学会理事、社会経済史学会評議委員など、また学内では、大学院経済学研究科長（1999～01年）および図書館長（2002～04年）を挙げておこなばなりません。大学院研究科長としての先生は、思うに時代の大きなうねりのなかで大学院のあるべき姿を見すえつつ、大学院の運営と改革に腐心されているご様子でした。また図書館長としての先生は、思いがけ

ずに遭遇した「図書館問題」に積極、果敢に対処され、その原因究明と再発防止に心を砕かれました。先生の手になる「報告書」は、その尋常ならざる迫力と説得力によって、本学の教員スタッフ一同に大きな感銘を与えるものでした。

毛利先生は大塚久雄の強い影響のもとに、イギリス経済史の専門家として、その研究生活をはじめられました。しかし研究の進展につれて、先生はいくどとなく脱皮をとげられ、単なる実証史家にとどまることはありませんでした。そのことは、初期論文「絶対王政期イギリス土地立法の論理」(1962年)や「1825年恐慌とイギリス綿工業」(66年)にはじまり、『自由貿易帝国主義』(78年)をへて、『イギリス福祉国家の研究』(90年)へといたる先生の研究経歴を見ても明らかです。もちろんそれは、たんなる研究対象の平行移動ではありません。それは、認識主体としての問題意識の深まりが、先生ご自身に促した脱皮であり、それをつうじて新たな認識の高みへと昇ろうとする飛躍でした。先生はそうした脱皮と飛躍を繰り返すことで、たんなる実証史家にはとどまりえなかったのです。しかも先生は、ごく最近にいたっても、アマルティア・センの研究に手を染められ、いま一段の脱皮をはかれようとしているかに見受けられます。

毛利先生は、先行諸研究を十分に消化・吸収され、その批判をつうじて自説を展開するのを常としていました。そのオーソドックスな研究手法は、おのずと先生の学問に重厚さと深みとを与えていたように思います。このせわしなく、変化の激しい時代にあって、研究対象に沈潜し、鋭い問題提起のもとに重厚な学問を展開された先生は、よきアカデミズムの伝統を体現されていたのではないのでしょうか。そういう先生は、俗受けをねらった軽妙さ、器用さ、小賢しさとは無縁で、あえていえば剛直であり、また無骨でさえありました。私たち経済学

部のスタッフは、そういう先生を同僚に持ち得たことを、よろこびとし、また誇りとしています。

毛利先生は、自他共に認めるアングロマニアです。そういう先生が、イギリスのカントリー・サイドをドライブされた時の様子を、興奮気味に、そしていかにも楽しそうに、何回も繰り返して話されるのを聞いて、私は本物のアングロマニアを見る思いでした。また先生は、将棋の愛好家でもあります。旧友の松浦利明先生と昔話をかわされながら、しかし真剣に将棋を指されていた先生を、私はつい昨日のことのように思い起こします。

毛利先生は、ご定年により本学を去られますが、これは先生にとって、新たな生活のはじまりであり、十分な時間をえて、さらなる脱皮をとげる絶好の機会でもあります。私たちは、そのことを率直によろこび、また先生が無事に定年をむかえられ、古希の齢をかさねられたことを祝さねばなりません。毛利先生、どうか今後も健康に十分配慮され、その学問によって、われわれ後輩をひきつづき鼓舞されますように。

2005年3月

経済学部長 酒 井 進